

平成29年10月26日（木曜日）

生涯教育の先駆者
廣池千九郎
 ゆかりの人
 ⑤白鳥庫吉

東洋史学の開拓者
 昭和天皇へのご進講も

女王卑弥呼が治めた邪馬台国はどこにあつたのか。現在も決着してない古代史最大の謎です。明治以降、九州説と畿内説との間で激しい論争が繰り広げられてきました。九州説を提唱し、畿内説の内藤湖南と対峙したのが白鳥庫吉です。

今回紹介する白鳥庫吉（東洋史学者、文学博士、1865～1942）は、日本における「東洋史の父」ともいえる存在で、種々学会の創設に尽力するなど、明治期の学問分野を牽引した人物です。廣池千九郎（法学博士、1866～1938）は、白鳥とは専門分野が近かつたこともあり、30年にわたって旧交を温めました。主著「道徳科学の論文」（昭和3年刊）の序文も依頼。その太い絆をご紹介します。



白鳥庫吉(1865～1942)

白鳥は現在の千葉県茂原市に生まれ、帝国大学文科大学史学科に第1期生として入学。そこで講師として雇われていたドイツ人のルートヴィヒ・リースに近代歴史学の実証主義を叩き込まれます。

その後、学習院や東京帝国大学で教鞭をとり、日本を含む東洋全域の歴史や地理の研究を行いました。現在、白鳥はわが国における東洋史学の開拓者として評価されています。

また、特筆すべき経歴として、大正3年か



『道徳科学の論文』

ら7年間、東宮御学問所御用掛として東宮時代の昭和天皇に歴史をご進講したことがあげられます。

開塾式で期待の弁
 「真に国家社会の木鐸となり得る」

廣池千九郎と白鳥は明治30年代から交流がありました。お互いの専門分野が近いことから、研究に関する往復書簡が複数残されています。

昭和3年、廣池は主著である「道徳科学の論文」の序文執筆を「旧友中あらゆる点において予の最も尊敬を払う」白鳥に依頼します。

白鳥は序文の中で「人類の実生活に関する重要な幾多の根本原理を発見し、これを秩序立てて一の学問的体系となせる」、「今日、かくのごとき学徳を兼有する著者によりて、かくのごとき人類の幸福享受に関する著書の公にせらるることは、全く現代における東西識者の要求に副うもの」と本書を高く評価しています。

また、廣池が道徳教育の拠点として昭和10年に設立した道徳科学専攻塾の開塾式に次のような祝辞を寄せ、期待を表しています。

「本専攻塾が博士の人格と学問とを中心として、その本来の使命を現実にして、目的を達し、在来の教育の欠点を補訂し、更に一般世間に対して警醒を与え、真に国家社会の木鐸となり得るものなる事は予の断じて疑はざるところなりとす」

この祝辞には廣池も勇気づけられたことでしょう。このように廣池と白鳥は学識だけでなく、互いの人格を尊敬し合い、晩年まで交流を続けてきたことが分かります。

（公益財団法人モラロジー研究所廣池千九郎記念館学芸員・矢野篤）